

幼 児 の 教 育

昭和十一年三月

三月

芽が出てゐましたと告げに来る子がある。花を見つけたといつて飛んで来る子がある。つれられて行つて見るに、その芽は低い雑木の枝の端の小さい緑粒であり、その花は名もない草の葉がぐれの蕾である。

「まだ、こんな小さいの……」。

またしても、こんなことをいふのがおきなだ。「まだ……」それは將來をのみ待つて今を見落す心、將來にのみ重きを置いて今を輕んずる心の、あさはかにも、すげない、つぶやきの聲である。春を四月の爛熟にのみ求めて、そのために却つて、芽の蕾の今の春を「まだ……」としか受けとり得ない、こちたくも、慇ふかな、おきなの結果癖である。

三月の春は早く子ぎもらに來る。一步々々あゆみよる小さい春を、そのまゝに一ぱいに享け、一ぱいに楽しんでゆく子ぎもらに。

(倉橋惣三)